
異聞現代里見八犬伝

花月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異聞現代里見八犬伝

【Nコード】

N0067Z

【作者名】

花月

【あらすじ】

時は現代。 現代に生きる八犬士のうち二人が里見家当主の下に居たが、ついに恐れていたことが起きる。 玉梓の封印が解け始めてしまったのだ。 里見は再び八犬士を集めることを犬塚信乃と犬川荘介に命じるのだった。

ブローグー―何でもない一日―（前書き）

- ・この小説はフィクションです。実在する人物、団体、地域、出来事などとは切り離してお考えください。
- ・誹謗中傷等はお辞め下さい。

プロローグ1―何でもない一日―

嘉吉元年、結城合戦で敗れ安房に落ち延びた里見義実は、滝田城主、神余光弘しんよを謀殺した逆臣山下定包を、神余旧臣・金碗八郎かなまりの協力を得て討つ。義実は定包の妻、玉梓たまずさの助命を一度は口にするが、八郎に諫められてしまう。玉梓は「里見の子孫を地獄に落とし、煩惱の犬にしてやる」と呪詛の言葉を残して処刑された。

時は過ぎて長禄元年、里見領の飢饉に乗じて隣領館山の安西景連が攻めてきた。落城を目前にした義実は飼犬の八房やっふさに「景連の首を取ってきたら娘の伏姫ふせひめを与える」と言う。八房は景連の首を持参して戻って来てしまう。八房は他の褒美に目もくれず、義実にあくまでも約束の伏姫を求め、伏姫は君主が言葉を翻すことの不可を告げ、八房と共に富山とやまに入る。

富山で伏姫は読経の日々を過ごす。翌年、伏姫は山中で出会った仙童から、八房が玉梓の呪詛を負っていたこと、読経によりその怨念は消されたものの、八房の気を受けて子を宿したことが告げられる。懐妊を恥じた伏姫は、富山に入った金碗大輔・里見義実の前で切腹し、胎内に犬の子がないことを証明する。切腹した傷口から流れ出た白気は伏姫のつけていた数珠を空中に舞い上げ、仁義八行の文字が書かれた八つの玉を飛び散らさせてしまう。

「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」のどれか一文字書かれた玉をもっており、尚且つ姓に「犬」が入っている人物が八人揃い、里見八犬士、と言われるようになった。

そして、時はあれよあれよという間に過ぎてゆき――。

現代の日本——とある小さな村。

縦横せいぜい五キロといった土地に所狭しと田園と民家、小さな商店街、さらには雑木林があるという、田舎を通り越してド田舎という土地に、それ——里見家はあった。この土地で一番権力をもつのは里見家だが、昔の伝説には遙か遠く及ばない。ただそれでもかつて有名だったこともあり村では異色を放つ古びた洋館に手伝いを連れた里見家当主と——“現在の”^{いま}八犬士の一人が住んでいた。

古びた洋館の一室、十畳程度の部屋に並べられた本棚の一角に、十代後半らしき少女は持っていた古い本を押し入れるようにして納める。本にはいやに綺麗な筆文字で里見八犬伝、と書かれていた。少女は題名の部分を人差し指で一撫ですると意味もなく息を吐き出した。

傷一つ無い、部屋の窓から差し込む太陽の光を反射する黒髪は太腿まで及んでおり、目も一点の汚れもない黒色で肌は透き通っており白く、目鼻立ちはすっきりしており、端整で女子とわかる顔たちながらも、凜とした気の強さを表しているようだ。

名を犬塚^{いぬづか}信乃。現代八犬士の一人で、「考」の玉を持っているというより、体内に埋め込まれている、もしくは封印されているといった表現が正確だ。

「うーん、どれも役に立ちそうなのはないわね」

信乃は溜息を吐いた。

現在わかっている現代の八犬士は自分を含めて二人。後一人は村には居るが、里見とは犬猿の仲、というよりはあちらが勝手に嫌っているだけの者だった。信乃より年上でありつつ子供っぽいところもあるが、何かと頼りにしている。……が、あちらが里見を嫌っている、出来るだけあちらからはこの洋館に近付いてこようとはしない。

「時間が無いつていうのに」

信乃は思わず愚痴混じりに呟き、ハッとして頭を振る。

実はあの里見八犬伝の悪役というか、そもそもの発端の張本人である玉梓は死に追いつめることはできずに、長い間封印されていたが、何百年という時が経つにつれ、封印が薄まってきてしまっている。玉梓が復活すれば何をしてくすかわからない。

それ以上に、玉梓の妖怪という名の部下が何処でどう聞きつけたのかこれは好機と動き始めているのだ。今は村の中で、しかも死者を出さずにおさえられているがいつ死者が出て、妖怪が村の外へ手を出すかわからない。

（なんとしても皆を護らなければいけないのに）

それは信乃が自身でたてた誓い。

未だ三歳にも達していない頃、村のこの洋館前に自身はネームプレート共々置かれていたと里見に聞いた。小さな村だ。信乃と里見が血縁者で無いこと、また、信乃の親はこの村には居ないこと——その話はすぐに村中に知れ渡った筈なのに、誰一人そんな差別はせずに温かく接してくれた。

護りたい。そんな思いが芽生えるのも、当然だったと思う。だけど信乃ともう一人では力が足りないのも辛いことだが事実。だから一刻も早く仲間を集めようとしていた。

だから里見八犬伝について少しでも触れた本の置かれたこの部屋にやって来ているのだが、一向に手がかりになりそうなものはない。数百年の間に玉は形を変え、ついには八犬士の心臓と一体化し、左胸部分に玉の文字と牡丹ぼたんの痣が現れた。それゆえ他人の目に見えにくくわからないため、もしかしたら本人以外誰も八犬士とは気付かなかったのかもしれない。

「どうすれば良いんだろう」

その呟きに答える者は居ない。かわりに、毎日変わらない声がドアの外から信乃を呼んだ。

「信乃——！！ 学校行きましょう！」

幼馴染の浜路だ。はまじまた家に上げることが済んでいた里見をうまくはぐらかして上がり込んだに違いない。小さく里見の困ったような

声が聞こえてきている。

「今行く」

信乃は里見の困ったような表情を思い浮かべて、苦笑しつつ部屋のドアを開けた。

これは何もない平和な一日の、ほんの「コマ」――。

ブローグ1―何でもない一日―（後書き）

―後書き―

初めまして。花月と申します。

里見八犬伝を見て「これだ！」と思って授業中に書き殴った……ものを大幅に訂正したものがこれです。

因みに教師には見つかってキツイ説教を食らったとかいう後日談がつきます。

初挑戦、これからどうなるかわかりませんが、温かい目で見て頂ければ幸いです。

途中で打ち切る、というのは個人的にどうしても避けたいです。

そのためにはグダグダにならないよう、精進せねば……！ と思っております。

これから宜しくお願いします。

プロローグ2―命令―

村唯一の高校の一角にある二年生の教室――そこに、信乃は居た。幸運なことに、窓際最後列の席だ。

いつものように一時限目から四時限目の授業を終えて浜路達友人と昼食をとって五時限目、六時限目の授業を満腹食べたせいで夢現で授業を受けて、今は帰りのホームルームの最中だった。

何気なく、本当に何気なく信乃が教壇に立って連絡事項を告げている初老男性教師から目を反らして窓の外を見ると、舗装されていない砂利道を歩く見慣れた人物が目に入った。

「こらあ、犬塚――！ 何やっとなるか――！」

「え、え――？」

教師の憤った声に信乃は我に返る。慌てて教室を見回すと、灰色のブレザータイプの制服を着た男女がくすくすと笑っている。

「俺の話を聞いとらんだろう――？」

「す、すみません――！！」

信乃は反射的に立ち上がり、頭を下げた。溜息が教壇から聞こえてくる。これだけ離れて聞こえるということは、これみよがしのつもりなのだろう。

「まあ良い。気をつけるように」

「はい」

信乃は小さく溜息を吐いて、席につく。そしてもう一度窓の外に目をやったが、其処にはもうあの見慣れた人物は居なかった。

（あれは……………）

茜色に染まった空を侵食するように、ゆっくりと黒が広がる。そんな空を眺めながら、信乃は浜路と帰路をゆったりとした足取りで歩いた。十一月独特の冷たい風が二人を容赦なく叩く。

「今日は珍しかったですわね。ホームルーム中に注意されるなんて」

そう言ったのは浜路だ。

髪はミルクティー色の肩につく程度のセミロングヘアに緩いウエーブをかけており、目は薄茶色で肌は信乃より僅かに色が濃く、何処か気高い印象を抱かせている。身長は百六十を僅かに越える信乃より頭一つ半分程小さく、女子の平均身長よりも小さいと思われる。

「ああ、うん。見知った人を見つけたんだけど、珍しいなあって」

「見知った人？」

「うん」

「誰ですか？」

「え？ ……聞くの？」

「ええ」

何故そんな事を尋ねると言いたげに浜路が頷いた。信乃は苦笑しつつ言葉を濁す。

（だって浜路とアイツって仲悪いもんなあ……）

するとそんな考えを見抜いたかのように、浜路の形の良い眉が怒ったように寄せられた。

「犬川ですわね！？」

いきなりの、しかも凶星を突かれたので、信乃は砂利道に転がっていた石に躓きつまずそうになった。浜路が倒れかけた信乃の左腕を引いたので幸い倒れることはなかったが、背後に居る浜路の纏う雰囲気刺々しいものに変わったことに気付いて、信乃は大袈裟と言われそうなほど身を縮こませた。

「あの犬川、妖怪退治を全て信乃に押しつけて！ 自分は何をしてるんだって話じゃありませんこと！？」

「いや、けどそっすけ莊介は莊介なりに……」

「甘い！ 大体犬川、勝手に里見様を嫌って家出なんて！」

「あの年の人は家出って言わないと思うけど。もう二十歳なんだし」
浜路がむうつと唇を尖らせる。怖いというよりは可愛いが、後が怖いので黙っておくことにした。

（それにしても莊介、何処に出かけたんだろ）

浜路があ、と歡喜に近い声をあげた。信乃は俯きつつあつた顔をあげる。

其処には信乃の住んでいる煉瓦造りの古びた洋館が建っていた。いつ見てもこの村では異色だ。

白いドアを開けて中へ入ると、今日お茶をする約束をしていた浜路も信乃に続いて中へ入る。白い壁と天井とは対照的に、床は薄い赤と黒で統一されていた。

左側にのびる廊下を進んだ一番奥の木の扉を開く。そこがリビングだ。恐らくこの時間帯は誰も居ないと踏んだ信乃の予想は裏切られた。

遂先程まで話題に上がっていた人物が黒い着物を着てソファに腰掛けて紅茶を飲んでいるという、和洋折衷の光景が其処に広がっていた。つまりその人物は犬川莊介であり、先程高校の前を堂々と通ったのはこの洋館に来るためだったのだ。

莊介の容姿は髪は黒茶色のストレート短髪で、目は澄んだ青色だが何処か凶暴さが見え隠れし、それを隠すようにサングラスをかけており、目鼻立ちはすっきりしていて端正な顔だちだ。格好も和洋折衷と言うべきだろう。

慌てて信乃は扉を閉めようとするが、それより早く浜路が信乃を押しのけてリビングへ突入とでも言えそうな動きで入った。

「何で此処に居るんですの！？」

「ん？ …… ああ、テメエが八路神^{やっみち}社娘」

申し遅れたが、浜路はこの村唯一の神社——八路神社の娘である。未だ巫女になるかどうかは決めあぐねているようだが、この屋敷の八犬伝について書かれた本も、八路神社から借りているのだ。借りる際、里見から詳しい話を聞いたようで、それによって現代八犬士についても知ってしまったようだ。

「浜路ですわ！ それより先程の問いにお答えになってくださいませんか！？」

「ああ」

莊介は嫌そうに眉根を寄せた。そしてシンプルなティーカップをテーブルに置く。

「呼ばれたんだよ。里見の奴から正式に命令が下った。……残りの八犬士をすぐさま見つけ出せ、つてな」

「！？」

信乃は目を見開く。つまり、それは――。

「玉梓の封印がそろそろ駄目になるってこと？」

「さあな。あの里見ヤローがやることなすことに興味ねえが、一応俺もこの村で世話になってる。しかも八犬士の一人と来たもんだ。嫌だがやるしかねえだろ」

村追い出されるのはごめんだと、莊介は続けた。

「信乃、テメエはどうする」

「決まってる。里見さんの願いでも命令でも何でも叶えるつもり。それに、莊介が居れば百人力……ううん、千人力だし、心強いなって思ってたのよ」

信乃が花を咲かせるようにぱあつと満面の笑みを顔に浮かべる。

莊介が慌てたように信乃から視線を外した。

（なんなんだろう？）

「……………」

浜路が怒りが混じった複雑な表情で信乃を見る。そして、何かを言おうとした時だった。

「物分かりのよい方達で安心しましたよ」

扉の方から穏やかな声ができる。莊介の顔が一瞬にして歪んだ。信乃と浜路がもしかして、と同時に呟いて、扉の方を振り向く。

其処には予想通りの男性ひしが居た。

艶のない黒髪は腰まで垂れ、茶黄色の目は穏やかな光をたたえており眼鏡をかけたことで優秀そうにも見えていて、肌は男性にしては白い。洋館の主あの主なのに黒茶色の着物を着ていた。年齢は二十を幾つか越えた頃だ。

里見という姓の方で呼ばれており、下の名は誰にも教えていないらしい。

「頼みますよ。我が同胞よ——玉梓を目覚めさせてはいけない」
その言葉に、誰も異を唱える者は居なかった。

第一話―村雨丸―

その日は雨が降っていた。秋も終わりに近い日の雨だというのに、梅雨を思わせるほど空気はじめじめとしていて気持ち悪い。

信乃はそんな気持ち悪さを振り切るように手にした木刀を軽く振る。私服でも制服でもなく、稽古着だ。

信乃は今洋館内の道場に居るのだが、それが四十畳にも及ぶ広さだったりするので、毎回驚いている。こんな日でなければこの広い道場での修業の時は機嫌が良かったのに、と呟いた。

「雨に文句言っても仕方ねえだろ」

出入り口から呆れたような声が返ってくる。莊介だ。莊介は出入り口のすぐ横の柱に背を預けていた。

莊介はあの命令が下った日から、毎日屋敷に顔を出すようになった。浜路は未だ、今更何だと文句を言っているがその内莊介のことも認めてくれるだろう。

「そうは言うけどね、こんなじめじめした日だったら文句の一つや二つ言いたくなるって」

「里見の性格もじめじめしてそうじゃねえか」

「……あれはね、じめじめっていうか根深いつて言うのよ」

「一応、不満はあるわけだな。つーかどっちも一緒じゃねえか」

信乃は木刀を振るのを止めて、莊介に向き直った。

「当たり前じゃない。この間二階から花壇に水やろうと思ってバケツ引つ繰り返したら里見さんの上に振っちゃって、その日から丸々二週間半口きいてもらえなかったんだから。食事と一緒に食べるのに、気まずいことこの上無いわ」

莊介が驚きつつ苦笑する。そしてシャツのポケットから煙草とライターを取り出した。

因みに今日の莊介の格好は和服では無く、白のワイシャツとジーパンだ。前から思っていたが、十二月近いのにその格好で風邪をひ

かないのだろうか。

煙草を口にくわえ、ライターで火を点けようとする。

「ちょ、馬鹿！！ 道場で何煙草吸おうとしてるのよ！？」

「駄目なのか？」

「駄目！ 絶対駄目」

信乃の必死さに莊介は再び苦笑してライターと煙草をポケットにしまった。口調の悪さから誤解されがちだが、断じて悪い人ではない——と、信乃は思っている。

「楽しそうですね」

莊介の背後から穏やかな声がする。莊介が眉根を寄せて身体を振り、後方——信乃の方へ大きく飛びさする。

里見は残念そうに溜息を吐いた。

「其処まで嫌悪を露わにしなくても良いじゃないですか」

「するに決まってるんだろ！！ 何思ってるのかわからねえ奴に隣に立たれたらそりや嫌にもなるわ！」

「……わかればわかったで凄くないですか？」

「うるせえ、揚げ足とるんじゃない！」

（……そして、決して心の底から里見さんが嫌いっていうわけでもないと思うんだけど……）

里見が残念そうな表情から一転、真面目そうな表情へ切り替えて、纏う雰囲気もぴりぴりとしたものに変わる。

「この雨」

「何だ？ テメエまで雨に文句つけんのか？」

「いえ。これは村雨むらみという名の妖怪の仕業です」

里見は淡々と、しかし険を孕んだ声で告げる。道場の空気が瞬時に凍りついた。

「八路神社の神主に尋ねましたから、確かです。出て頂きますね？」

「テメエの命令だからじゃねえよ。妖怪は倒す。……絶対だ」

そういう莊介の声は酷く硬く、殺気が籠っている。思わず信乃は身を竦めた。

「信乃さんは？」

「私も、……皆を護るためなら」

里見は満足げな笑顔で頷いた。

「頼みましたよ」

その言葉も聞き終わらない内に、莊介が飛び出る。信乃も木刀を持ったまま道場を飛び出た。

雨が思っていた以上に酷い。バケツを引つ繰り返したところか、学校のプールを引つ繰り返しても伝えられないのでは、と思う程、雨が激しかった。

その雨が少しでも凌げる雑木林に信乃は向かう。莊介とは別行動になってしまった。

稽古着や髪が肌に張り付いて気持ち悪いが、我慢して足場の悪い雑木林で何度も滑りかけつつ進んだ。

雑木林に入って自身に降る雨は減るかと思ったが、逆に激しくなっている。

あまりの激しさに肌が痛くなってきた、後数十分すれば雨に打たれた場所が痣になっているのでは、と心配してしまう。

「でも、激しさが増すってことは……」

こっちが正解か、と口の中だけで呟いて足を進める。

雨の音が葉擦れの音を消している。

足取りが重い。衣服が水分をたっぷり含んでいるためだろう——いつもなら雑木林二周してもあまる体力だというのに。

足元がおぼつかず、身体が倒れそうになる。

ぐらりと視界が揺れ、身体が前のめりになり——右腕を痣がでるのではと思う程力強く握られ、背後に引つ張り起こされた。

驚いて背後を振り返る。其処には息を切らした莊介が居た。

「ったく……面倒かけやがって」

「……ごめんなさい」

「しおらしいな。気味悪いほどに」

その憎まれ口も今は温かく感じる。

疲労した自分を莊介なりに元気づけようとしてくれているのだろう、と信乃は思った。……信乃以外、たとえば浜路にそんな事を言えば怒鳴りつけられるだろうが。

ふと、そんな信乃の目に温かい鈍い光が、縦に一筋映った。

（あれがこの雨の元凶……）

根拠もなくそう思う。

その鈍い光を放つ物は、もう少し先に進んだところにあるのだろう、とも。

信乃は呼びとめる莊介に答えることなく足を進める。莊介も舌打ちして後を追いかけて来た。

「……そういや、今日は妖怪と出会わないね」

「ああ。そうだな」

莊介もその言葉に不思議に思ったのか、首を傾げつつ頷く。そして暫く顎に手をあてて思案する素振りを見せた。

「……村雨。そうか、村雨っていや、あれか」

「あれ？」

「里見八犬伝に出てくる宝刀って言えばわかるか？」

「うん。最近は妖刀として扱われるわよね。……あ、そっか、あの刀が村雨で、この雨を降らせてるってこと？」

「多分な。時が過ぎてゆく中で、本当に妖刀になっちまったんだろ」
莊介が複雑そうな表情で溜息を吐く。

村雨とは南総里見八犬伝の村雨丸のことで、斬った人物の血を水で洗い流すとか、殺気をもって鞘から抜き放てば水気があがるとか、有名な妖刀、ではなく宝刀として書かれていた。

因みにその初代八犬士の犬塚信乃の刀でもある。

何だか名前が同じだけに、複雑な心境になっている信乃の目に、あの光の原因であるものが映った。

僅かに隆起している地面の頂上に、ひと振りの刀が突き刺さっていた。妖怪が放つとされる妖気を纏っている。

刀は澄んだ水を纏っていた。水が刀を護るように逆流している。

「あれが」

莊介が背後で息をのむのが聞こえた。

「村雨丸」

信乃はその刀——村雨丸へ向かって駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067z/>

異聞現代里見八犬伝

2011年12月2日14時55分発行